

和田博通編

蜀山人黃表泉集

古典文庫

和田博通編

蜀山人黃表系集

古典文庫

古典文庫四五三冊

昭和五十九年六月二十日発行

非売品

蜀山人黄表紙集

編者 和田博通

発行者 吉田幸一

印刷者 共立印刷株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇) 二七一七
振替口座東京九一四五九七番

蜀山人黃表紙集

目次

凡例……………五

影印 翻刻

一、源平物語勘定（梶原再見二度の賭）……………一・七

二、寿塩商婚禮（漢国無体此奴和日本）……………二五・二五

三、料理頭てん天口有……………四〇・四〇

四、返々目出鯛春参……………八五・七三

五、種風小野之助拳角力……………一三・七

六、手練偽なし……………一四・一三

解題……………和田 博通……………一三

凡 例

一、本書には、大田南畝作の黄表紙六部を影印と翻刻で収めた。

一、影印は、各作品とも、原則として絵題簽を各冊の始めに掲げた。底本に存しない絵題簽は、可能な限り他の資料によって補った。従って、本書の形態は、底本の現状とは必ずしも一致しない。但し、『源平惣勘定』と『寿塩商婚礼』は改題再摺本のものでし、『手練偽なし』は底本の表紙・題簽（いずれも後補のもの）をそのまま掲げた。初摺袋入本の題簽・袋を求め得なかったが故の処置である。

一、翻刻は、原文に忠実であることを旨とし、字体を現行のものに改めたほか、用字・仮名づかい・清濁等を正すことはしなかった。但し、緋読の便をはかるため、以下の処置を施した。

1、新たに句読点を付した。

2、人物の詞書等に用いられるへ はすべて省略し、人物の詞や引用句等は「」で示した。

3、誤刻と思われる箇所、および疑問の存する箇所には、(ママ)と傍記した。

一

源平惣勘定(げんぺいそうかんじょう)

梶原二度の賭(再見 梶原にど 賭かけ)

東京都立中央図書館加賀文庫蔵

〔上〕

へいけよをとつて二十よ年、大じやう入どうきよよりは、おごりのあまり、ふくはらのべつさうへ引こみ、にし八でうの上やしきへは、せがれしけもりをさしおかれしが、此重もりは、おやににぬかたざうにて、しらびやうしなどはふりむいてみたこともなく、青びやうしの本ばかりよみ、女郎はかはず、さけのます、とんといかぬしろものなり。

「これく、兩人のもの、おやぢがちうやのおごりでは、この三千両もあぶなもの、どうぞ、でいりのてうにんのほうへ、三十両一ぶに

でも、五十兩一ぶにでも、まわしておいてくれる。まさかのときは
らきりかねじや」

なんばの二郎

せのをの太郎

「たゞいまは、三兩一ぶまゑ利と申よのなか、かゝる利やすなおか
ねはござりませぬ」

(二オ)

なんばせのをがちよくらにて、しげもりに一はいくはせ、いわう
さんへおさむべき三千兩のかねをつり出し、入道へさゝげ、おのれも
十ぶ一をせしめける。

にうだう、大きによろこび、そのころ、みやこ六はらの名にたちば

なの、ぎわうぎぢよといへる白びやうしをよびて、さはぎけるが、そのころ、又、ほとけといへる上しろもの出て、むかしのべんてんぢぞうにもおとらぬほどのまいのそで、さはらばころばんふぜいなり。

「うれしやさらばまはんとて、ほとけもとはほんぶなり、ほんのふぼだいのしゆもく町より、なにはづにさくや此花、ふゆの花には何くぞ、すいてうこうけいに、つらやまくらが二つある」と、ぎわうぎぢよをしりめにかけて、おしかへし／＼うたいける。

「いよく、ほとけさん、ほとけにおやはないはづだ。ありがたへと申やす」

ぎわう、せうじにらくがきする。

もれ出るもかむのもおなじのべのかみいづれかかみのくずとなる

べき

ふくはらの中ずのけしき、やぶんのていとかはります。

(二ウ・二オ)

へいけは、こがらすまるといふふねにのり、あきれむかふじまへ、ふねゆさんにでかけしが、あきの太郎がまへをとをりしとき、太郎がいののあらいごい、とんでふねの中へいる。

かへりは、すぐにほりへつけて、みやじまの惣じまい、一ちうやの大おごり、はけながしまのとうのいけなどかおよぶところにあらず。

「ありがたいのみそずよりきついもの」と、入道をむせうにまるめる。

いつくしまのむかふじま

おごるものひさしからず、さしも大きなへいけのしんだいも、入道のおごりにて、ふくはらのべつさうも人手にわたり、ふうがでもなくしやれでもなく、せう事なしのにし八でうのわびすまい、いかゞしてか、いへの内へ火のふる事たびくなり。これを、きよもり火のやまいといふ。また、ある日の夕ぐれに、かねのくめんにさしつかへ、ひろにはをながめいたりしに、いづくともなくすまんのざとう、あるいはしゆもくかたしゆもく、はいとうしぶんにいたるまで、しろめをむき出しこゑをあげ、利のとゞこをりはたりしは、おそろしくまたものすごし。

「めくくめくらには、利そくをおはらい下さりませ」

それ、りくとう三りやくのずつとおくの手にいわく、「とらおほかみより、もるどのおそるべし」と云々。

まことなるかな、きよもしげもりよをさりて、むねもりのよとなりしかば、身をしるあめのふるじやくせん、かけはらふべきあてはなし。

つねもりのざしきは、つねに雨もありあり。「もるはたきの水、火はふるとも」なんぞとしやれるやつさ。

もりのすけないところがすけもり。

さねもり

「せつかく、たいかうあんのくろあぶらでびんひけをそめしが、